

言語行動発達の基本軸

—読み聞かせの事例を通して—

決崎 幸夫
(尚絅短期大学)

はじめに

言語行動発達の基本軸という言語発達理論を最初に提出したのは1980年のことである。その当時、私は自分のこどもの日常行動を観察し、記録をとっていた。しかしながら、どのような枠組みでこどもの多様な言語行動を記述すればよいが苦慮していた。熟慮の結果生まれたのが言語行動発達の基本軸である。

言語行動発達の基本軸は、当初から人間関係軸と能記-所記関係軸と時間軸の3つから構成されていた。1984年に、この3つの基本軸の中の時間軸が、母胎期、第1意味期、第2意味期の3つの発達段階に区分された。

かくして、できたのが図1言語行動発達の基本軸である。

この理論を使って、ジェニーやクシュラという障害児の言語獲得過程及びチンパンジーの言語獲得の過程を分析してきた。

本研究の目的は、この理論の基本的な構成要素である、人間関係軸、能記-所記関係軸、及び母胎期、第1意味期、第2意味期からなる時間軸をクシュラという障害児の絵本の読み聞かせによる言語獲得の事例により具体的に説明し、この理論の有効性を論証していくことにある。

言語行動発達の基本軸の特徴

図1言語行動発達の基本軸に示されているように、ヒトとヒトとの人間関係軸と能記-所記の言語関係軸の2つの基本軸からなる空間構造が、母胎期、第1意味期、第2意味期という時間軸にそって変動していくという全体構造をもっている。ブロンフェンブレンナー(1984)は、今後のあるべき発達モデルとして、クロノシステム・モデル(chrono-system model)をあげている。クロノシステム・モデルとは、時間軸に従って構造が変化していくというモデルである。

言語行動発達の基本軸の第1の特徴は、このクロノシステム・モデルの特徴をもっているということである。

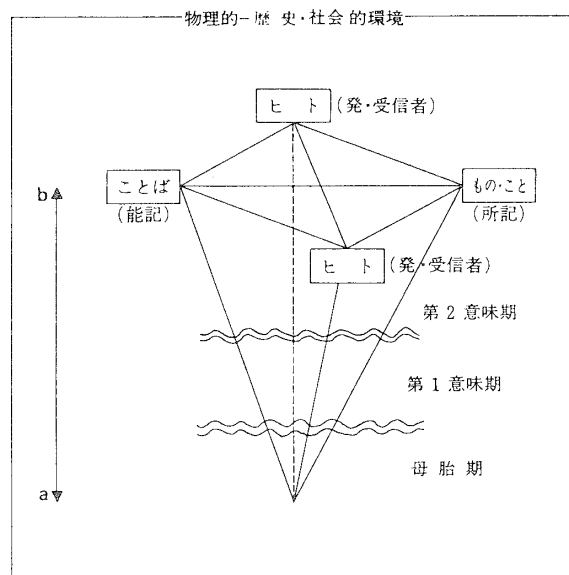


図1 言語行動発達の基本軸

第2の特徴は、この理論が、言語行動の情意的側面を示す人間関係軸と、知的側面を示す能記-所記関係軸とを同時にとらえることができるということである。

第3の特徴は、クロノシステム・モデルとしての特徴をもつこの基本軸が、物理的-歴史・社会的環境によって図られていくという点にある。このことは、基本軸が物理的-歴史・社会的環境の制約を受けるということである。つまり、場所、年代や社会的背景が変化すれば、同一事象が生起しても解釈が異なるということを示している。

第4の特徴は、 $a \leftrightarrow b$ で示される発達の方角にかかわるものである。これは、発達の方角が一方解ではなく、双方解であることを示している。つまり、あるレベルまで達したヒトがもとにもどることもあり得るし、かつそれが常なる退行としてではなく、積極的な意味をもつという点にある。積極的な意味とは、例えは創造的退行と呼ばれるものや、幼児性の維持等である。

人間関係軸

ホスピタリズムや言語発達遅滞の原因として、人間関係の不全が指摘されている。つまり、人間関係の欠

如及ぶ不全が子どもの飛進に重要な影響を及ぼすことは明らかである。故に、ヒトの言語行動飛進を論ずる場合に人間関係の側面は、欠くことのできない要因の1つとなるのである。

人間関係が豊かに保証されれば、そこに親しみ・愛情・自信・信頼・希望・意志が生まれてくる。つまり、人間の情意の側面の飛進が保証されるのである。重度の障害をもって生まれたクジラの場合も人間関係の豊かさの保証によりすばらしい飛進をとげることができるのである。

クジラの事例では、彼女は、生後4か月から両親による絵本の読み聞かせを受け、目も耳も悪く、体の自由のきかない重度の障害により、夜も昼も寝ようとしないうに、両親は、起きている間中、絵本を読み聞かせてやっているのである。

絵本の読み聞かせは、大人の膝にのせ、その背中で胸で支えてやなという姿勢で行なわれた。この姿勢は絵本を顔にくっつくようにして見せなければ見ることができないクジラが絵本に焦点をあわせることや背骨の弱いクジラを支えろかに適しているのである。

この姿勢は、クジラに安らぎを与え、両親との信頼を深め、絵本の読み聞かせを通して得た言語的知識と共に、この情意の側面の充実が、後のすばらしい言語飛進を保証したことは疑う余地のないことである。

能記-所記関係軸

能記とは、意味するものであり、ことばであり、記号である。所記とは、意味されるものであり、もの・ことである。ものは、具体物がイメージ、概念へと変化していくし、ことは、それらものの働き、性質、あるいはものとの関係や形のつかみにくい現象すべてをさしている。イメージのレベルでいうと、ものの静的イメージに対応し、ことが動的イメージに対応するといえよう。

音声記号を例にとり、能記-所記関係を説明すると、「イヌ」という音声能記があり、「犬」という具体物が所記ということになる。同じく、「ユメ」という音声能記が「夢」という内容を指し示すということになる。もちろん、記号には音声記号、文字記号、手話などがあり、前者記号には身ぶり、絵画がある。

クジラの場合には、この能記-所記関係は絵本の読み聞かせを通して習得したことになる。彼女の場合、能記は文字であり、所記は絵本の絵である。健常児

の場合、能記は音声であり、所記は目に見える具体物であり、その具体物が絵になり、写真になり、音声記号が絵と結びつくのは、クジラよりずっと後になってからである。

しかし、クジラの場合は早期よりいわばより抽象的な記号である文字が能記となり、より具体物を絵が所記として結びつくことにより、能記-所記関係を学んでいくことになる。

時間軸

1) 母胎期 母胎期とは、ヒトとヒトの関係及び能記-所記関係が未分化な時期である。この時期の言語行動(伝えあい)は、新生児が母親の声や動きと同調し、母親も新生児の動きと同調するという相互作用により始まる。

新生児期には、他に目と目の接触や反射動作などの伝えあいが見られる。その後、身ぶり、提示行動、指さし及び音声による伝えあいが生じてくる。

2) 第1意味期 第1意味期は、1歳5か月ごろに現われる音声模倣に始まる。音声模倣というのは、大人が「パパ」と言えば「パパ」とすぐに、子どもが模倣することである。

私の子どもの1歳5か月の時の観察によれば、それまで自発語(例えば、パパ、ナイナイ、ニャンニャン等)でいう、それが自発的に飛せられる場面から離れた時には、模倣しないうに、何のこともわからずげん顔をしていたのに、急に音声模倣を始める時期に始まるのである。

この音声模倣がどうして急にできるようになるのかを推測すると「単語レベルで自発語すら模倣しないうに、そこから、音声模倣ができるようになるためには、単語が場面から単独に取り出されても、それが言語として機能するのだということが理解できる水準にまで達していなければならぬ」と考えられる。言い換えると、能記-所記の指示機能に気がつくと思われる。

3) 第2意味期 第2意味期とは、能来聴覚障害関係者の間で言われてきた九歳の壁以降の時期をさしている。

九歳の壁とは、この時期に健常児が獲得し始める抽象的思考が、あることには超えることのできない壁として存在することを意味している。この抽象的思考の基礎は、若くことばの質的転換と内言の使用が自由になることである。